

人のまうでんがごとくなりと申侍りし事を、きと思ひ出て、わが身のうへのやうにおぼゆれば、ねんごろにとぶらふいと不便の事かな、さてかなふまじくやおぼゆるといふ、まことに思ひたつもおほけなき事なれど、何事も心ざしによるわざなれば、なかははげまし侍らざらん、よのつねの人の乗馬下人らうれうごとき、ゆたかにもちたるも、その心ざしなきは、いまだあふみの國をだに見ぬかすもしらす、かくたづくしくやすからぬ身なれども、思ひたちぬれば、さすがにまからる、也、となんかたり侍りし、

〔陰徳太平記 三十六〕山名誠通戰死附武田高信謀反并因州布施鳥取諸所合戰之事、

高信モ彌邪謀不怠シテ終ニハ布施ヲ攻亡サント欲スル志有ケル故、先布施ニ爲人質置タリシ、十歳ノ嫡男ヲ盜取ン事ヲ思ヒ、土手一ト云賢々敷盲人ノ有ケルニ、此事ヲ頼ケレバ、此座頭應諾シテ、ヤガテ弟子一人召連、布施へ越テ行ヲ廻シ、彼子ヲ小葛籠ニ納テ盜去ニケリ、

〔陰徳太平記 五十二〕輝元隆景備中國發向附諸處合戰事

新四郎手ガ兄ニ友梅ト云ル盲人ノ有ケルガ杖ヲツキ走リ出、手盲目友梅ト云者也、早頸打テト呼リケレバ、木原次郎兵衛馳寄テ討テケリ、郎等一人付從ケルガ、坂下彦六郎ト名乗、腹搔切テ失ニケリ、木原ハ友梅流石手ノ庶流ナレバ、事ノ様艶カリケリト思、死骸ヲ見レバ、杖ニハアラデ左禮タル竹ノ杖ニ、短冊ヲ一枚付タリケリ、

暗キヨリ暗キ道ニモ迷ハジナ心ノ月ノ曇リナケレバ、トアルヲ見テモ、眞ニ本始一體ノ眞如ノ月光不暗心根ナレバ、此冗亂ノ半ニモ、カク思ツバケルコソアハレナレト、人皆感涙ヲ催セリ、〔慶長見聞集 七〕盲目遠路をえる事

見しは今、江戸町に下岡才兵衛と云人、京へのぼる始ての道なれば、よきつれも哉と云所に、座頭聞て、われ此度官の爲、上洛仕るけちえんに、めくらを同道有てたべかしといふ、才兵衛聞て、道々